

小学校音楽科鑑賞領域における主体的に学習に取り組む態度を養う学習指導の工夫 — 自己選択・自己決定を促す題材の構成 —

坂町立横浜小学校 井内 志穂

研究の要約

本研究は、小学校音楽科鑑賞領域における主体的に学習に取り組む態度を養う学習指導の工夫について考察したものである。鑑賞領域における主体的に学習に取り組む態度は、学習に関する自己調整を行いながら、曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて粘り強く理解しようとしたり、その理解を生かしながら、曲や演奏のよさなどを見いだし、曲全体を味わって聴こうとしたりする姿として見ることができる。文献研究から、自己調整学習を進めるためには「予見」「遂行コントロール」「自己省察」の三つのステップを回していくことが重要であり、また、音楽科で主体的に学習に取り組む態度を養うためには「①成功体験を蓄積させること」「②学習方略に関する知識を与えること」「③自律的な学習の時間を確保すること」が大切であることが分かった。これらと広島県教育委員会の提唱する問い及び多様な選択肢を組み込んで題材を構成し、研究授業を行った結果、自己選択・自己決定を促す題材の構成は、小学校音楽科鑑賞領域における主体的に学習に取り組む態度を養うことに有効であることが明らかとなった。

I 主題設定の理由

令和3年1月「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）¹⁾には、これからの学校教育において、自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう、「個に応じた指導」を充実することが必要だと示されている。このことについて長谷川諒（2023）は、音楽科における主体的に学習に取り組む態度は、教師主導の一斉教授の場合よりは、自律的な学習の時間において発揮され、涵養されると述べている。

また、音楽科の授業の在り方について、平成28年2月教育課程部会芸術ワーキンググループ（第6回）は「今後は、予定調和を期待して終わるのではなく、この授業で学んだことはこういうことだ、今日の授業で経験したことがこれからの生活の中でこんなかたちできっと生きてくる、という位置付けを学習の中に組み込んでいく必要があると思う。」¹⁾と指摘している。

所属校の児童（第5学年・第6学年）に実施した、鑑賞に関わる実態調査を図1に示す。

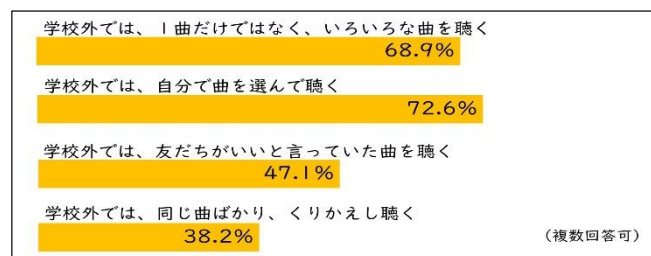


図1 鑑賞に関わる実態調査

図1から、学校外では、児童それぞれが多様な方法で自由に鑑賞していることが明らかとなった。また同実態調査では、これまでの鑑賞の活動においてもう1回聴きたかったと授業で感じたことがある児童が65.7%いることも明らかとなった。授業における鑑賞の活動と、学校外での鑑賞の活動とが乖離していることが推察できる。

これらのことから、所属校における鑑賞の活動は、授業での学びや経験と、児童の学校外での音楽の関わりとの結び付きが薄く、能動的な鑑賞態度を育てることに課題があると考えられる。

このことは、市川裕加里・福島さやか（2020）が、音楽科鑑賞において、教師主導を進める授業では、能動的な鑑賞態度を育てることは難しいと指摘していることに重なるものである。また、長谷川（2023）は、能動的な鑑賞態度を育てることが難しい理由として、従来型の音楽科教育では「良さや美しさ」に関する文化の継承を中心にした授業を行ってきており、学習者主体の自己決定的な表現の余白があまり担保されていなかったと述べている。

以上のことから、これからの音楽科教育には、教師主導の一斉教授に偏った文化継承的な学習指導ばかりではなく、授業での学びや経験を、学習者自身が学校外での音楽の関わりに生かせそうだと実感できるよう、自律的な学習の時間を位置付けた学習指導が必要であると考え、研究主題を「小学校音楽科鑑賞領域における主体的に学習に取り組む態度を養う学習指導の工夫」と設定した。

Ⅱ 研究の基本的な考え方

1 音楽科鑑賞領域における主体的に学習に取り組む態度とは

平成28年12月「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」では「学びに向かう力、人間性等」について、個人内評価で感性、思いやり等を、観点別学習状況の評価で主体的に学習に取り組む態度を見取るとし、特に主体的に学習に取り組む態度については、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり、思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することを求めている。これら二つの側面は、実際の学びの中では相互に関わり合いながら立ち現れる。鑑賞領域における思考力、判断力、表現力等とは、鑑賞についての知識を得たり生かしたりしながら、曲や演奏のよさなどを見いだし、曲全体を味わって聴くことである。また、鑑賞領域における知識とは、曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて理解することである。これらのことから、鑑賞領域における主体的に学習に取り組む態度は、学習に関する自己調整を行いながら、曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて粘り強く理解しようとしたり、その理解を生かしながら、曲や演奏のよさなどを見いだし、曲全体を味わって聴こうとしたりする姿として見ることができる。

2 自己選択・自己決定とは

奈須正裕（2022）は、従来の学校は何から何まであらかじめ決められていて、授業においても教師の指示の下で進められており、子供たちにとってはほとんど自由がなかったことを指摘し、子供たちの主体性や、自ら学び進める力を育むには、自己選択の機会を増やすことが有効であり、「学びの自己決定を子どもに委ねる」ことを提唱している。

また、広島県教育委員会（令和4年）は「個別最適な学びに関する実証研究」の取組において、教師が子供の実態に応じた多様な選択肢を用意し、児童生徒が自己決定することが、学校で育成したい資質・能力の向上や子供たちの主体性・理解度・満足度の向上につながることを明らかにしている。あわせて、広島県教育委員会（令和6年）は、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、児童生徒一人一人が学びを自分事として捉え、興味をもって学び続けることができるよう、教師が授業において質の高い問いを設定することを提唱している。児童生徒が答えのない「問い」について考えることが、問い続けることや考え続けることとなり、自ら探究することにつながるとしている。単元構想シート記

入例⁽¹⁾からは、問いがあることで見通しをもつことができていることが分かる。

これらのことから、本研究では、児童が学習に関する自己調整を行いながら、曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて粘り強く理解しようとしたり、その理解を生かしながら、曲や演奏のよさなどを見いだし、曲全体を味わって聴こうとしたりするために、問いの解決に向けて活動の選択肢から活動を自己決定することを、自己選択・自己決定とする。

3 自己選択・自己決定を促す題材とは

(1) 鑑賞領域における自己選択・自己決定を促す題材の構成

本研究では主体的に学習に取り組む態度を養う学習指導の工夫として、曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて理解しながら、曲や演奏のよさなどを見いだし、曲全体を味わって聴く力の育成に向けて自己調整しながら粘り強く学習に取り組む姿が見られるような題材となるよう構成を行う。

伊藤崇達（2019）は、自らの学習を調整しようとする学習を「自己調整学習」と呼び、これをうまく進めるために、「予見（見通し）」「遂行コントロール（深め進める）」「自己省察（振り返り）」（以下「三つのステップ」という。）を回していくことが重要であるとしている。また伊藤（2020）は、主体的に学習に取り組む態度を評価にするにあたり、粘り強さについては、「取り組み始める最初の段階」「学びを維持し続ける段階」「学びに充実感を感じて、発展させようという意欲や姿勢などの強い意志の段階」というように段階的に捉えることで評価が可能になること、自己調整については、自分の学びの状況を振り返り、目標や学び方、モチベーションの持ち方などについて自分なりに工夫しているかどうかを評価することになると述べている。

また長谷川（2023）は、音楽科において主体的に学習に取り組む態度を育成するために、授業の中で次の三つのポイントを押さえる必要があると述べている⁽²⁾。

- ①成功体験を蓄積させる
- ②学習方略に関する知識を与える
- ③自律的な学習の時間を確保する

長谷川（2023）の示す三つのポイントから、これからの鑑賞領域における学習指導には、①わかった、できたという達成感をもたせること、②学校外での鑑賞の活動に生かせそうだと実感できる味わい方を経験させること、③自律的に学習する時間を保証することの三点が重要であると考えた。なお、本研究では、学習方略として、特に聴く活動についての選択肢を示し、自己選択・自己決定を促すことと

(1) 広島県教育委員会（令和6年）：「広島県教育資料」「第1章「学びの変革」の推進「本質的な問い」による授業改善」1-2-6に詳しい。

(2) 長谷川諒（2023）：前掲書p. 36を参照されたい。

する。この三点及び伊藤（2019）の三つのステップを踏まえると、鑑賞領域における自己選択・自己決定を促す題材は、大きく三つのフェイズで構成されるところを考える。それは、(1) 予見にあたる「音楽と出会う」(2) 遂行コントロールにあたる「聴き深める」(3) 自己省察にあたる「曲全体を味わって聴く」である。曲全体を味わって聴くために、広島県の提唱する「題材を貫く問い」を設定する。この「題材を貫く問い」は、(3) 曲全体を味わって聴くフェイズの終了時に、児童が自分の考えをもつことができるよう、題材を通して考え続けるものである。題材終了時に、「題材を貫く問い」に対する自分の考えをもっている状態を、曲や演奏のよさなどを見いだし、曲全体を味わって聴くことができている状態だと考え「鑑賞領域における自己選択・自己決定を促す題材の構成」として図2に示した。

児童の自律的な学習が、曲や演奏のよさなどを見いだし、曲全体を味わって聴くことにつながるよう、三つのフェイズにはそれぞれ問いを設定する。三つのフェイズに設定した問いに対する自分の考えをもつことは、「わかった、できた」という達成感をもつことにつながり、その達成感が成功体験として題材を通して蓄積されていく。また、各フェイズには、問いに対する自分の考えをもつために個人で学習を進める自律的な学習の時間を設定する。これは、フェイズの最初に問いを基にした課題の確認を行った後に設定する、聴く活動の多様な選択肢から自己選択・自己決定する時間のことである。聴く活動の多様な選択肢には、次のようなものが考えられる。「どの音源を聴くか」「冒頭から聴くか、中間あたりから聴くか、終末部分から聴くか」「同じ音源を繰り返し聴くか、別の音源と比較して聴くか」

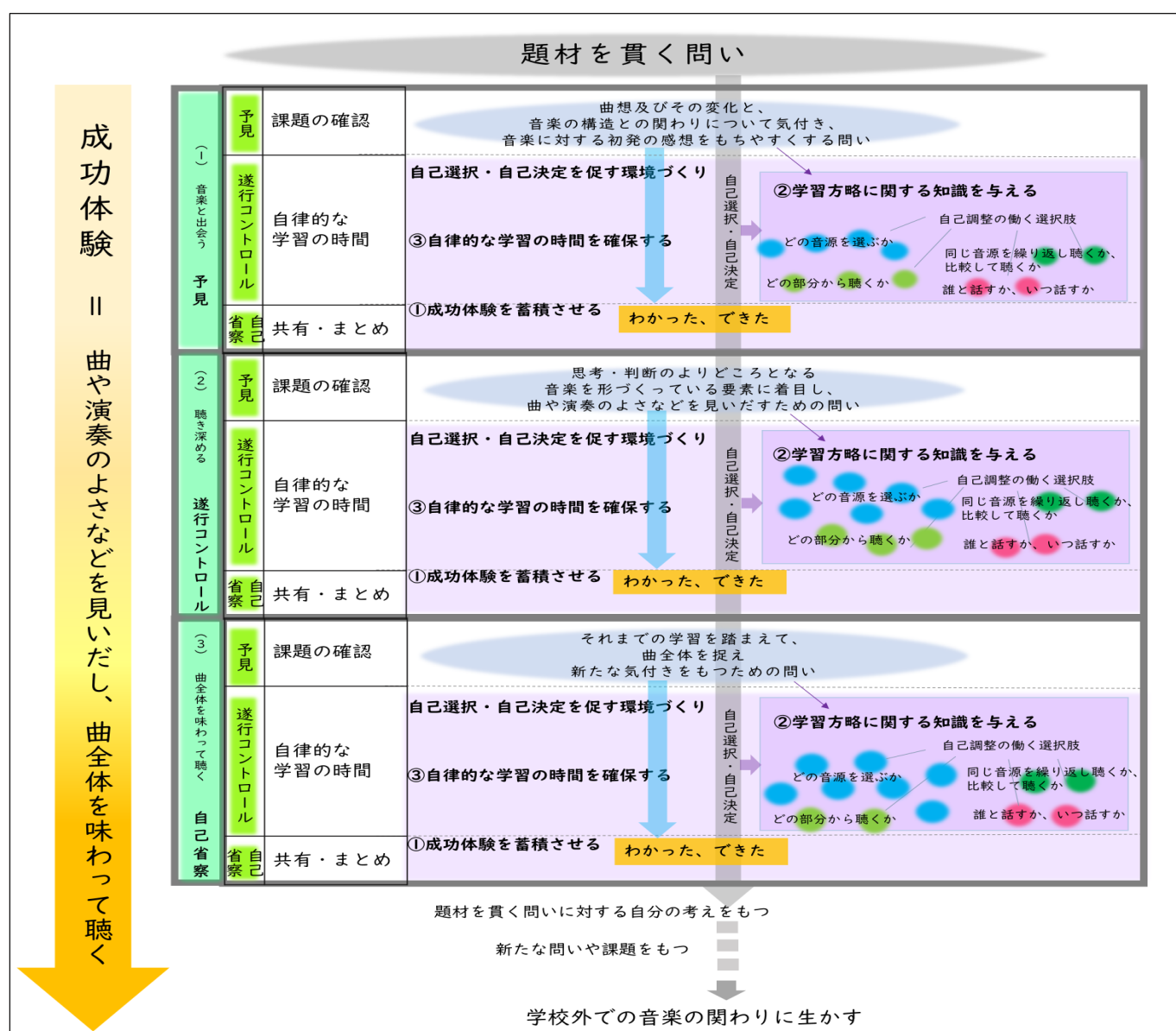


図2 鑑賞領域における自己選択・自己決定を促す題材の構成

「一緒に聴くか、また分かれて一人ずつで聴くか」
「同じ音源を選んだ人と話すか、違う音源を選んだ人と話すか」「何人くらいで話すか、又は話さないか」「いつ話すか」などである。これらの選択肢を基に、問いに対する自分の考えをもつために繰り返し自己選択・自己決定することで、学習に関する自己調整を行いながら、曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて粘り強く理解しようとしたり、その理解を生かしながら、曲や演奏のよさなどを見いだし、曲全体を味わって聴こうとしたりする姿を見ることができると考える。自律的な学習の時

間の後には、問いに対する自分の考えを交流する時間を設定することで、曲全体を味わって聴くための新たな視点を得たり、「わかった」という喜びや、自分の考えをもつことが「できた」という喜びを、児童が感じたりすることが期待できる。

題材を終えた後には、教材曲に留まらず、新たな問いや課題につなげたり、学校外における音楽の関わりに生かしたりすることを示している。

(2) 題材の構成例

図2を基に作成した題材の構成例を図3に示す。本研究では、この例を基に検証を行う。

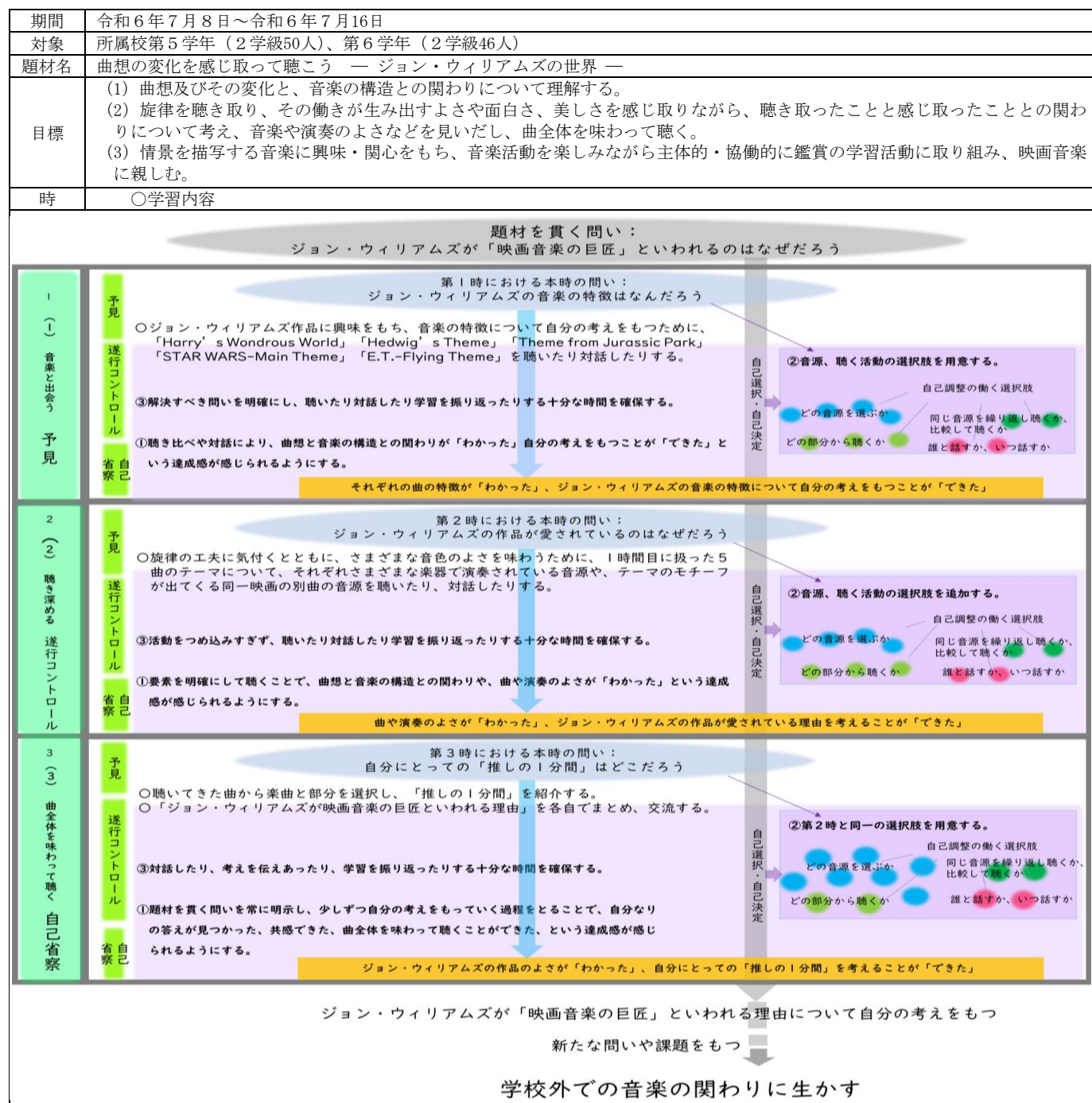


図3 題材の構成例

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

小学校音楽科鑑賞領域において、自己選択・自己決定を促す題材の構成を行えば、主体的に学習に取り組む態度を養うことができるだろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表1に示す。

表1 検証の視点と方法

	検証の視点	方法
1	題材の構成は、学習に関する自己調整を行おうとすることに有効であったか。	アンケート
2	題材の構成は、粘り強く知識を獲得したり、思考・判断・表現しようとしたりすることに有効であったか。	授業観察 動画撮影 共同編集アプリ等の記述の分析
3	自己選択・自己決定を促す題材の構成だったか。	振り返りの分析 インタビュー

Ⅳ 研究授業の分析と考察

1 問いについて

全3時間それぞれの問いは、三つのステップに基づく。三つのステップと問いを表2に示す。

表2 三つのステップと問い

ステップ	問い	
予見	ジョン・ウィリアムズの音楽の特徴はなんだろう。 (第1時における本時の問い)	ジョン・ウィリアムズが「映画音楽の巨匠」といわれるのはなぜだろう。
遂行コントロール	ジョン・ウィリアムズの作品が愛されているのはなぜだろう。 (第2時における本時の問い)	
自己省察	自分にとっての「推しの1分間」はどこだろう。 (第3時における本時の問い)	(題材を貫く問い)

本題材で設定した題材を貫く問いは、「ジョン・ウィリアムズが映画音楽の巨匠といわれるのはなぜだろう」という、答えが一つではない、何度も問い直され答えが更新され続ける問いであり、3時間を通して自分なりの答えを考えていくものである。毎時間のはじめに必ず確認し、拡大して黒板前面にも掲示し、何に向かって粘り強さや自己調整を発揮すればよいのかが分かるようにした。また、3時間目終了時に全員が自分なりの考えがもてるよう毎時間、知識の獲得や思考・判断・表現しようとするにつなげる本時の問いを設定した。

本研究では、自己調整について、伊藤（2020）の提唱する「自分の学びの状況を振り返り、目標や学び方、モチベーションの持ち方などについて自分なりに工夫しているかどうか」を参考に、聴く活動の選択の工夫と定め、「問いを意識して聴く活動を選択している」「自分に合った聴く活動を選択してい

る」という二段階で判断し、検証することとした。この検証は、児童の振り返り、事後アンケートを基に行う。段階の判断の基準を表3に示す。

表3 段階の判断の基準

段階	判断の対象	判断の基準	割合
自分に合った聴く活動を選択している	振り返り アンケート	自分のペースや好みに合った聴き方の振り返りを記述している。又は、聴く活動の選択の理由が、自分にとって役に立ったものとなっている。	18.9%
問いを意識して聴く活動を選択している		題材を貫く問いや本時の問いを意識した聴き方の振り返りを記述している。又は、聴く活動の選択の理由が、題材を貫く問いを解決するためのものとなっている。	81.1%

振り返り又は事後アンケートから、聴く活動をまったく選択できない児童は0%、「友だちと聴いたら考えがもっと深まるから、友だちと聴く」「じっくり聴けるから一人で聴く」といった、自分に合った聴く活動の特徴を述べている児童は18.9%である。そして「一曲聴いただけでは巨匠といわれる理由が分からないから、いろいろな曲を聴き比べる」「曲の構成を理解するためにははじめから最後まで聴く」といった、題材を貫く問いや本時の問いに対する自分の考えをもつために、問いを意識して聴く活動を選択している児童は81.1%であった。ここには後述する、児童A、B、C、E、Fも含まれる。

次に、学習に関する自己調整と問いの関係性を考察する。

題材を貫く問いを意識して学習を進めた児童Aは、第1時の振り返りに「いつもなら映像に注目して観ているけど今日は音楽に注目して聴いた」と記述していた。児童Aへのインタビューから、題材を貫く問いがあったことで、聴く活動を問いに合わせて選択しようという自己調整が働いたため、問いが有効であることが分かった。

図4は、題材終了後に実施した、題材を貫く問いに対する自分の考えを3時間考え続けることができたかについてのアンケート結果である。よくできた72.3%と、まあまあできた24.5%を合わせた96.8%の児童が、題材を貫く問いを意識しながら粘り強く学習を進めていたと実感していることが分かる。

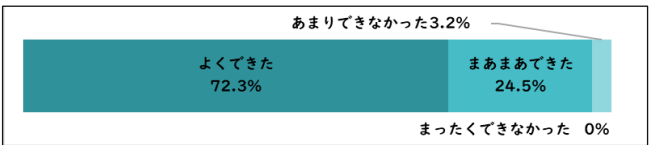


図4 題材を貫く問いに対する自分の考えを3時間考え続けることができたか

本研究では、実際には児童がどの程度粘り強さを発揮していたかについて、伊藤（2020）の提唱する「取り組み始める最初の段階」「学びを維持し続ける段階」「学びに充実感を感じて、発展させようという意欲や姿勢などの強い意志の段階」の三段階で判断し、検証することとした。この検証は、児童の事後アンケート、授業観察、共同編集アプリの記述を基に行う。段階の判断の基準を表4に示す。

表4 段階の判断の基準

段階	判断の対象	判断の基準	割合
学びに充実感を感じて、発展させようという意欲や姿勢などの強い意志の段階	アンケート 授業観察 共同編集アプリの記述	今回感じた映画音楽のよさを今後の生活に生かそうとする記述や、経験した聴く活動を今後の生活に生かそうだと感じている記述が見られる。	67.4%
学びを維持し続ける段階		今後に発展させようとする強い意志までは感じられないものの、題材を振り返る記述が見られる。又は、曲を聴いた後に、聴き取ったことや感じ取ったこと、曲の特徴、曲や演奏のよさ、本時の問いに対する考え等、共同編集アプリに記述している。	31.6%
取り組み始める最初の段階		曲は聴いてはいるものの、共同編集アプリに記述していない。	1.0%

事後アンケートから、学びに充実感を感じて、発展させようという意欲や強い意志の段階にいる児童は67.4%であった。また、事後アンケート又は授業観察、共同編集アプリの記述から、学びを維持し続ける段階にいと見て取れた児童は31.6%であった。99.0%の児童が粘り強さを発揮したといえる。

表5 児童の主な振り返りの記述

「学びに充実感を感じて発展させようという意欲や姿勢などの強い意志の段階」にいる児童の記述例
・（題材を貫く問いがあったから）映画の中の雰囲気と音楽のどのようなところが同じかを考えながら聴けると思う。 ・（題材を貫く問いがあったから）曲にも注目できて、場面の雰囲気が分かりやすくなると思う。 ・（第2時の本時の問いがあったから）細かいところまで聴くことが生かせそうだった。 ・（第3時の本時の問いがあったから）ほかの曲でも、音楽や演奏のよさを見つけられそう。
「学びを維持し続ける段階」にいる児童の記述例
・（題材を貫く問いがあったから）音楽を聴くだけでどんな映画が分かりやすいと思う。 ・（題材を貫く問いがあったから）そのテーマにあった音楽で人を惹きつけると思えた。 ・（題材を貫く問いがあったから）巨匠といわれる理由がそれぞれちがっておもしろかった。 ・（第1時の本時の問いがあったから）全部の曲を聴いて共通点を見つけた。

（第3時の本時の問いがあったから）友だちと一緒に聴いたり自由に動いたりしゃべったりすることができて、とても楽しかったし、すごく勉強がしやすかった。

表5にはそれぞれの段階にいる児童数名の記述を、児童の主な振り返りの記述としてまとめた。

「学びに充実感を感じて発展させようという意欲や姿勢などの強い意志の段階」にいる児童Bは、事後インタビューで、題材を貫く問いや本時の問いに対する考えが自分と友だちとで異なり、それを話し合うのが楽しかったと答えており、答えが一つでない問いを楽しみながら学習を進めたことが分かる。

また巨匠といわれる理由について役に立った聴き方として、繰り返し聴く方法を挙げており、「くりかえし聴けば、分からなかったことがまた分かるかもしれない。」と記述していた。目的に応じて聴き方を自己選択・自己決定しながら粘り強く学習を進めたことがうかがえる。

さらに児童Bは、第1時にはジョン・ウィリアムズがどのような人物かも分からなかったが、第2時に本時の問いを、また3時間かけて題材を貫く問いを意識しながら聴いたことで、本時の問いや題材を貫く問いに対する自分の考えがだんだんもてようになったことを話した。3時間かけてよく分かるようになったと自覚しており、題材を貫く問いや本時の問いを意識して学習を進めていることが分かる。問いや、問いに対する考えをもつために多様な選択肢があったことで、児童Bの自己調整や粘り強さが発揮され、このような題材の構成が、自己選択・自己決定を促すことにつながったと考える。

「学びに充実感を感じて発展させようという意欲や姿勢などの強い意志の段階」にいる児童Cは、3時間をかけて題材を貫く問いに対する自分の考えを深め、毎時間の本時の問いに対する考えをもつ中で曲全体を味わうことができるようになった児童である。児童Cは、第1時も第2時も、強弱に着目して聴いていたが、第2時では、聴き取ったことの中に「さび」「繰り返し」という言葉が出てきているところから、音楽を形づくっている要素である旋律にも着目しはじめたこと、また「最初は」という言葉から、曲全体を聴いていることが推察できた。

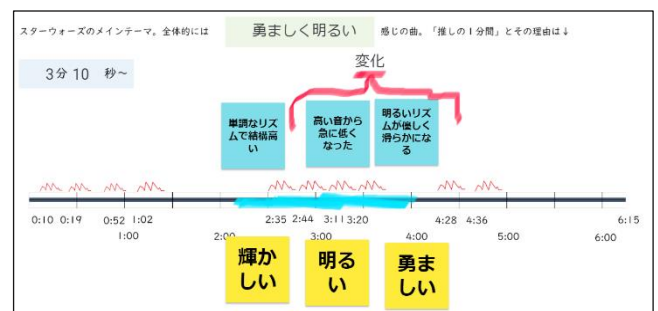


図5 児童Cの作成した「推しの1分間」

図5は、第3時に児童Cの作成した「推しの1分間」の説明スライドである。スライドの記述から、曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて理解しながら、曲や演奏のよさなどを見だし、曲全体を味わって聴いていることが分かる。

第3時終了時に児童Cは、題材を貫く問いについて「強弱や高低の変化が激しくて迫力がある音楽に心がつかまれる人が多いから」と考えた。第1時終了時の「迫力のある音楽が人気だから」という考えと比較すると、どちらも「迫力のある音楽」に言及していることは変わらないが、強弱以外に旋律の動きにも注目していること「音楽に心がつかまれる」という、曲のよさを感じていることに、変容が見られる。

児童Cは第1時の学習前には題材を貫く問いの意味も分からないといった様子だったが、どんどん理解が深まり、映画と音楽とのつながりが分かったと感じている。友だちと聴いたり一人で聴いたりするうちに、曲の共通点やよさが分かり、理解度が上がったと自覚している。理解の深まりには、特に友だちと話すことが役に立ったと感じており、友だちの考えが分かって自分の考えともつなげたことがよかったと振り返っている。題材を貫く問いや本時の問いに対する考えを、聴いたり話したりしながら自分なりに深めていったこと、すなわち3時間かけて粘り強く学習に取り組んでいったことで、音楽をより深く味わうことができたことと推察する。児童Cにとっては、問いがあったことで、粘り強く知識を獲得し、思考・判断・表現しようとしたと考える。

ほぼすべての児童に自己調整、粘り強さが発揮されていた一方で、児童Dは発揮させることができなかった。

児童Dは、題材を貫く問いや本時の問いを意識しているとは評価できない児童であり、「取り組み始める最初の段階」にいる児童である。題材終了後の事後アンケートで、題材を貫く問いを3時間考え続けることもあまりできなかったと振り返っている。実際に、この問いについて、第1時と第3時とで考えの変容が見られなかった。

児童Dはこれまでの学習状況からも、聴き取ったことと感じ取ったことを結び付ける点において難しさを感じており、今回の題材でも、特に感じ取ったことを表現することに課題が見られた。児童Dは今回の題材では音源や聴く活動を自己選択し、鑑賞の活動に参加しており、振り返りにも「楽しかった」と記述していた。児童Dの感じたことに共感するなどして、感じ取ったことを表出する支援が必要であった。聴き取ったことと感じ取ったことを結び付ける支援によって、児童Dが曲全体を味わうきっかけを得ることができれば、本時の問いに対する自分なりの考えをもつことにつながり、題材を貫く問いを

意識した鑑賞の活動ができ、自己調整を行おうとする姿も見られたのではないかと考える。

以上のことから、本題材で設定した題材を貫く問い及び本時の問いは、学習に関する自己調整を行おうとすることや、粘り強く知識を獲得したり、思考・判断・表現しようとしたりすることに有効であり、この問いを三つのステップに基づいて設定することは、自己選択・自己決定を促す題材の構成として有効であったと考える。

2 選択肢について

題材終了後に実施した、曲の雰囲気を感じ取るのに役に立ったこと、音楽や演奏のよさを見つけるのに役に立ったことについてのアンケート結果を図6に示す。本題材では、48種類の音源の他、聴く活動にも多様な選択肢を用意した。特に、何回聴いてもよかったこと、自分で音源を選ぶことができたこと、曲のどこを聴いてもよかったことなど、図1で示した学校外での聴き方に近い聴き方を役に立つと感じて選択していた児童が多かったことが分かる。100%の児童が、自分で音源、聴く活動について自己選択・自己決定しており、多様な選択肢は児童の学びに役に立ったといえる。

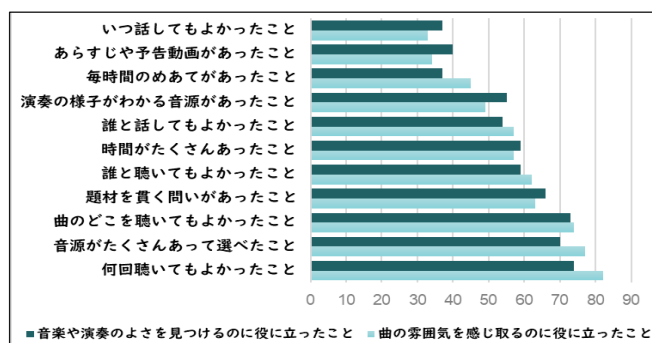


図6 役に立ったと感じている手立て

遂行コントロールのステップにおいて、一人で聴いたり、繰り返し聴いたり、友だちと話しながら聴いたり、さまざまな聴く活動を選択しながら学習を進めた児童Eは、事後アンケートで「本当にこの3時間は、すごく楽しかった。」と記述している。楽しかった理由について、これまでの一斉形態での鑑賞とは異なり、自律的な学習の時間が確保されていたこと、選択肢にあるさまざまな聴く活動を選択して鑑賞できたことを挙げている。一斉形態のこれまでの鑑賞の活動では、聴き逃すこともあったが、一人で聴けると、もう一度聴きたい箇所が繰り返し聴けるのでよかったと話していた。児童Eにとっては全3時間を通して多様な選択肢から自分に合った聴く活動が選べることで自己調整が働き、多様な選択肢のある題材の構成が、自己選択・自己決定を促すことにつながったと考える。

また児童Fを観察すると、1時間の中で曲を限定する聴き方をしており、1曲を何度も繰り返し聴いていた。1曲を深く聴いており、第1時の時点で、音楽を形づくっている要素に着目しながら、曲全体を味わっている記述が見られた。第1時と第2時では異なる楽曲を選択しているが、第2時も選んだ曲数自体は少ないものの、曲の細部まで注目して聴いている記述が見られた。そして第1時の振り返りに「いろんな聴き方で真実を明らかにしたい」と、次を見通す記述もしていたが、事後アンケートからは実際にさまざまな聴き方を試したことも分かった。

たくさんの選択肢があるゆえ、数多く曲を選んで聴く児童の多かった今回の題材であったが、曲数をしぼりながら丁寧に鑑賞し、最終的に、映画に音楽があることのよさを自分なりに感じることでできた児童もいることが明らかとなった。教師主導の一斉形態では成し得なかった結果だと考える。

全3時間を通して多様な選択肢から自分に合った聴く活動が選べることで児童Fにとっても自己調整が働き、さらに問いがあったことで見通しをもつこともでき、自己調整が働いたと考える。多様な選択肢のある題材の構成が、自己選択・自己調整を促すことにつながったといえる。

本題材で用意した選択肢は、学習に関する自己調整を行おうとすることや、粘り強く知識を獲得したり、思考・判断・表現しようとしたりすることに有効であり、特に自己選択・自己決定を促す題材の構成の遂行コントロールのステップには欠かせないと考える。

V 研究のまとめ

1 研究の成果

- 自己選択・自己決定を促す題材の構成は、小学校音楽科鑑賞領域における主体的に学習に取り組む態度を養うことに有効であった。特に、三つのステップを基にした、答えが一つではない、何度も問い直され答えが更新され続ける問いと、多様な選択肢があることで、児童の粘り強さと自己調整が発揮され、児童は主体的に学習に取り組むことができた。

2 研究の課題

- 時間の確保と振り返りの問い方についての二点が課題である。題材の構成でポイントとした「自律的な学習の時間の確保」ができるよう、題材の構成にあたっては、教材曲の長さに応じた構成時間を慎重に検討する。また、毎時間の振り返りの際には、振り返る視点を明確にし、予見につながる自己省察ができる振り返りにする。以上二点を、今後の課題とする。

3 今後に向けて

- 本研究は、いずれ授業での学びを、学校外での音楽の関わりに生かすことができる児童が育ってほしいという願いをもちながら進めてきた。検証授業期間中や授業後には次のような児童の姿が見られた。

- ・いつもはタブレットを学校に置いて帰るのに、家に持って帰ってまで聴こうとする姿や、授業後にも聴き続けようとする姿
- ・気に入った曲のテーマをリコーダーで吹こうと試みて休憩時間に練習する姿や、吹けるようになったから聴いてほしいと報告に来る姿
- ・ジョン・ウィリアムズの他の曲にもドソではじまるものがあるか調べてみよう、と話す姿

いずれも、授業での学びや経験を、児童自身が、学校外での音楽の関わりに生かせそうだと実感している姿を見たように感じた。

本研究では、主体的に学習に取り組む態度を養う一端を見ることができた。本研究での成果と課題を今後、音楽科の表現領域での学習や、他教科での学習にも生かし、学校全体で主体的に学習に取り組む態度を養っていききたい。

【引用文献】

- 1) 中央教育審議会：「教育課程部会芸術ワーキンググループ（第6回）議事要旨」文部科学省【https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/069/siryo/1383618.htm】（最終アクセス令和6年6月4日）

【参考文献】

- 中央教育審議会（平成28年）：「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」
- 中央教育審議会（令和3年）：「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」
- 長谷川諒（2023）：「『主体的に学習に取り組む態度』の学習評価完全ガイドブック」明治図書出版株式会社
- 市川裕加里・福島さやか（2020）：「小学校音楽科における鑑賞教育に関する一考察」『福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学』第8号p. 13
- 奈須正裕（2022）：「学びの自己決定を子どもに委ねる」『T-Navi Edu Vol.13』株式会社光文書院pp. 3-6
- 広島県教育委員会（令和4年）：「個別の状況に応じたカリキュラムの編成・実践に関する提案～Society5.0を見据えた『学びの変革』のアップデート～」【実践事例編】pp. 3-7
- 広島県教育委員会（令和6年）：「広島県教育資料」第1章「学びの変革」の推進「本質的な問い」による授業改善
- 伊藤崇達（2019）：「めあての提示や振り返りの工夫で、子どもが自ら学ぶ力を育む」『VIEW21 教育委員会版 2019 Vol.3』ベネッセ教育総合研究所pp. 22-23
- 伊藤崇達（2020）：「変わる高校教育『主体的に学習に取り組む態度』をいかに評価するか～自己調整学習に注目して～」『Guideline 7・8月号』河合塾全国進学情報センターpp. 22-25